

## 患者さんの声

### 労働者の味方

昭和33年頃、路面電車を利用した時代、木造校舎に似た屋根上に、「労災病院」の看板が思い出される。「もし怪我した時は、此処に来れば良い」と安心感を与えてくれた。朝7時から夜8時までが、労働者の定時であり、毎日30kg~60kgの荷物を背負ったり、肩に担いで運搬することは普通の仕事であった。時には12km~20kmの買出しに出掛ける日も、慣れた道のりである。そんな時代に生きた働き蜂の人達は現在70才以上の方々に、足腰に異常が発見されても本人自身は驚いてはいない。むしろ「若い頃は無理をした」と車のない時代を思うだけだ。16才頃から家庭の手助けとして野山で働く青少年にも重荷での運搬作業は、成長するはずの体を止める事になる。その過去の重労働が、今の我々の変形した体である。

そんな私も過日、腰痛のため、ついにホテルの様な洋館造り「中部ろうさい病院」の看板に、「来れば良い」の思いが50年過ぎて、お世話になることとなった。患者さんにも優しく、病も軽くなりそうな看板、そして広い高原の中に吸い込まれる感じで、昔の疲れが一度に集中した感じを持ちつつ玄関口ビーへ。院内で迷いながらもホテル同様、受付から目的の科へと、優しく案内して戴き先ずは一休み。昔人間に戻り、院内の設備に気を取られている内、待ち時間も少なく診察室へ。先ず骨のレントゲン撮影の説明で、先生からの一言、「これは、ひどいですね。」私には、骨が擦り減って座骨が外にはみ出しており、状態がひどいことは覚悟。でもここで、先生の言葉から「よく働いた体ですね。良く使った体ですね。もう少し楽になるように治療しましょう」とほのかな言葉で説明を受けたかった。現代の医療機器の進歩にその一切をお任せするのではなく、先生方の豊かな治療法でその人、その人の病に立ち向かって戴きたい。そして助手として大きな支えになる看護師さんの力。まだまだ「看護婦」と気軽に呼んでしまうが、患者のわがままでもあり甘えでもある。より一層頼れる病院になってほしいと願っています。

(名古屋市熱田区 S.K)

## 編集後記

皆さんは病院を選ぶ時にどんなことに気を付けていますか？私が病気になった時の病院選びのコツは、「若い医師や看護師がきちんと教育を受け、笑顔で仕事をしているか？」です。

有名な医師が居て、いくら診断や手術がうまくてもその人が居なくなったら何も残らない病院では患者さんにとって一生付き合いたい病院にはなりません。

私たちの病院では患者さんへの診療だけでなく若い医師や看護師の教育にも力を注いでいます。

笑顔で働く若いスタッフを見かけたらぜひ皆さんも応援してください。

(EK)